

令和 8 年 2 月 20 日

大阪市総合教育センター
教育振興担当 実践研究グループ
首席指導主事様

研究コース	
A グループ研究A	
校園コード(代表者校園の市費コード)	
511001	
選定番号	102

代表者	校園名:	堀川小学校
	校園長名:	衣笠 博政
	電話:	6358-3336
	事務職員名:	藤原 沙妃
申請者	校園名:	堀川小学校
	職名・名前:	校長・衣笠 博政
	電話:	6358-3336

令和7年度 「がんばる先生支援」報告書

◇「がんばる先生支援」について、次のとおり報告します。

1	研究コース	コース名	A グループ研究A	研究年数	継続研究(3年目)												
2	研究テーマ	知・徳・体のバランスのとれた児童の育成 － 問い・対話・振り返りを重視した授業改善 －															
3	研究目的	<p>1. 単元始での問い、展開での対話、単元末の振り返りを重視することで、見通しを持ち主体的に学びに向かう児童を育成する。</p> <p>2. 系統を意識することで、基礎・基本を定着し、応用的な力を育成する。</p> <p>3. 本校の研究の積み重ねを活用し、「教えること」「気づかせること」に重点を置き体力の向上を図る。</p> <p>4. 学習中の言葉に着目し、「学習の言葉：学習用語」「関わり言葉：支える言葉、関わる言葉」を豊かにし協働する学びを研究する。</p> <p>5. 教職員の学びの場を保障し、授業観、指導観、児童観をアップデートし、学校力を向上させる。</p>															
4	取り組んだ研究内容	<p>いつ、何のために、どのようなことを実施したのかを具体的に記載してください。(MSOシック 9.5※ イント)</p> <p>知徳体をバランスよく育成するための研究を、昨年度の成果を基盤として計画的・発展的に推進する。研究の軸は引き続き「問い・対話・振り返り」とし、児童の学びの質の向上と教職員の専門性向上を同時に図る。行頭に主となる対象を記した。</p> <p>【全】：知徳体全体に関わる内容、【知】：知に関する内容、【徳】：徳に関する内容、【体】：体に関する内容</p> <p>【全：研究全体会・全体研修会】4月 研究内容・年間計画の共通理解</p> <p>・昨年度までに定着した「問いー対話ー振り返りのサイクル」を学校全体の学習モデルとして再確認し、全教職員で共通理解を図る。</p> <p>・単元始めから評価を意識した授業づくりを重点とし、評価規準と問いの構造を結び付けた授業設計を研究課題とする。</p> <p>・知部会、徳部会、体部会を創設し、学期ごとに全学年の取り組み内容を共有する。</p> <p>・教職員の「問いー対話ー振り返り」を継続するため、ポートフォリオを活用した学びの可視化を継続実施し、個人の学びと組織の学びの接続を図る。</p> <p>【知：全体研修会・授業研究会(教科を限定しない)】年間を通して系統を意識した授業研究</p> <p>・教科を限定せず、各教科において「問いの質」「対話の構造」「振り返りの外化」に焦点を当てた授業研究を実施する。</p> <p>・単元構想段階から評価規準を明確にし、児童と評価を共有する授業づくりを推進する。</p> <p>・授業後の協議会では、児童の学びの変容を中心に協議し、ポートフォリオにより教職員の学びを蓄積・共有する。</p> <p>・実践の蓄積を校内で整理・共有し、研究の再現性と継続性を高める。</p> <p>【徳：全体研修会・集団づくり】安心と協働を基盤とした学級づくり</p> <p>・安心して学び合える学級風土の形成を基盤に、「支える言葉」「関わる言葉」を意識した関係づくりを継続する。</p> <p>・学級活動・授業・行事を通して、自己有用感・所属感・協働意識を育成する取組を体系化する。</p> <p>・児童の言葉・行動の変容を可視化し、学習と生活の両面から徳の育成を検証する。</p> <p>【体：授業研究会・実技研修】系統性と実感を重視した体育科研究</p> <p>・「教えること・気づかせること」を明確にした授業づくりを継続し、系統性を意識した指導を推進する。</p> <p>・児童の「できた」という実感を重視し、運動量の確保と技能の定着を両立させる学習構成を研究する。</p> <p>・対話の中で生まれる言葉を整理・共有し、学びを支える言語環境の充実を図る。</p> <p>【全：研究推進委員会】研究の組織的推進と可視化</p> <p>・授業研究前後の視点整理を行い、全職員で共通の研究視点をもって授業を参観・協議する。</p> <p>・児童アンケート・教職員アンケート・ポートフォリオを活用し、研究成果と課題を継続的に可視化・共有する。</p> <p>・実践の整理・蓄積・発信を行い、学校全体としての研究力と発信力の向上を図る。</p>															
5	研究発表等の日程・場所・参加者数	<p>研究発表等を実施した日・場所・参加者数を記載してください。</p> <table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <td>日程</td> <td>令和 7 年 11 月 12 日</td> <td>参加者数</td> <td>約 70 名</td> </tr> <tr> <td>場所</td> <td colspan="3">堀川小学校</td> </tr> <tr> <td>備考</td> <td colspan="3">令和7年12月3日 体育科師範授業・実技研修会 参加者数：約40名 場所：堀川小学校 waku×2.com-beeに研究会資料「指導案」掲載済み</td> </tr> </table>				日程	令和 7 年 11 月 12 日	参加者数	約 70 名	場所	堀川小学校			備考	令和7年12月3日 体育科師範授業・実技研修会 参加者数：約40名 場所：堀川小学校 waku×2.com-beeに研究会資料「指導案」掲載済み		
日程	令和 7 年 11 月 12 日	参加者数	約 70 名														
場所	堀川小学校																
備考	令和7年12月3日 体育科師範授業・実技研修会 参加者数：約40名 場所：堀川小学校 waku×2.com-beeに研究会資料「指導案」掲載済み																

6	成果・課題	<p>大阪市教育振興基本計画に示されている、「子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力」の育成および「教員の資質や指導力」の向上について、申請書に記載した検証方法から得られた結果と、それらからの結果に基づいた考察を、具体的に記載してください。</p>
		<p>【見込まれる成果1】</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 「子どもが心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力」の育成</p> <p><input type="checkbox"/> 「教員の資質や指導力」の向上</p> <p>問いを持ち学びを続ける授業改善により、主体的に学ぶ姿勢を育成できる。単元末の振り返りにより、他の学びにつながる気づきを促すことで、学びの質が向上する。新しい学びをする際、既習の学びを振り返り活用する姿が見られる。「次何をするの?」という児童の声から「次はこれをしたい」という児童の声へ変わっていく。学びの言葉や振り返りに授業の内容が表現されていく。</p> <p>《検証方法》</p> <p>「知識・技能」「思考・判断・表現」の伸びに加え、「主体的に学習に取り組む態度」の伸びを検証する。児童アンケートの「学習は先生が教えてくれるもの」の回答割合が減り、「学習は自分で学んでいくもの」の回答割合が増える。学びの言葉や振り返りを検証することで、授業を振り返ることができる。</p>
		<p>[検証結果と考察]</p> <p>児童アンケートにおいて、「学習は先生が教えてくれるもの」という回答が大幅に減少し、「学習は自分で学んでいくもの」という回答が増加したことから、学習観の主体的変容が確認された。授業場面では、「次は何をすればいいですか」といった発言から、「前に学んだことを使えばできそう」「まず比べてみたい」「次はこれを調べたい」など、学習の進め方を自ら構想する発言へと変化が見られた。また、振り返りの記述においても、「前の学習とのつながり」「考えの変化」「次の課題意識」が表現されるようになり、学びを構造的に捉える力の育成が確認できた。</p> <p>これらの変化から、問いを持ち学び続ける授業改善は、児童の主体的に学習に取り組む態度の育成に有効であり、思考・判断・表現の質的向上にもつながっていると考えられる。また、授業構成や発問、振り返りの工夫を通して、教員の指導力向上にも寄与している。</p>
		<p>【見込まれる成果2】</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 「子どもが心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力」の育成</p> <p><input type="checkbox"/> 「教員の資質や指導力」の向上</p> <p>関わりの言葉を大切にしているので、学びの中で互いに支え合い、関わり合う学級風土ができる。集団の良さを教員も児童も感じることで、豊かな学びを展開することができる。一人も残さない学びは、関わりの言葉が大きく影響する。得意なことでも苦手なことでもチャレンジする意欲を育成し、学びに対して前向きな児童を育成する。</p> <p>《検証方法》</p> <p>授業の満足度が学級の満足度、学校満足度につながっていると仮説を立てたため、児童アンケートの「学級の安心感」「苦手なことにもチャレンジしようと思う」「友だちが支えてくれた」の項目の肯定的割合が8割以上となる。児童の学びを近くで見ている保護者へアンケートから、児童の学びへの満足度が8割以上となる。</p>
<p>[検証結果と考察]</p> <p>児童アンケートおよび保護者アンケートにおいて、「学級の安心感」「苦手なことにもチャレンジしようと思う」「友だちが支えてくれた」の各項目で肯定的回答が全学年で8割以上となり、安心して学習に取り組める学級風土の形成が数値的に確認された。授業観察では、「一緒にやろう」「大丈夫だよ」などの関わりの言葉が児童間で日常的に交わされ、協働的に課題解決に取り組む姿や、苦手な課題にも挑戦する行動が認められた。</p> <p>これらの結果から、本取組は、対話を重視した授業改善と関わりの言葉を基盤とした学級づくりを通して、協働性・挑戦意欲・自己肯定感の育成に寄与しており、「知・徳・体のバランスのとれた児童の育成」という研究テーマの達成に資する成果を上げていると評価できる。また、教員においても、学級経営力および指導力の向上が認められる。</p>		
<p>【見込まれる成果3】</p> <p><input type="checkbox"/> 「子どもが心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力」の育成</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 「教員の資質や指導力」の向上</p> <p>教員の学ぶ場を知徳体バランスよく保障することで、学習指導力と学級経営力が向上する。このことは、児童の満足度や学級での居心地の良さにつながる。また、公開授業研究会で実際に授業を見た参加者が満足し、取組内容を実践することで本研究が広まっていくこととなる。</p> <p>《検証方法》</p> <p>教員アンケートから「授業づくり」「学級経営」に関する項目の肯定的割合が8割以上となる。児童アンケートの「学校満足度」「学級満足度」「集団の結びつき」の項目の肯定的割合が8割以上となる。公開授業研究会に参加した教員アンケートの満足度が8割を超える。本校の取り組みを実践する割合を8割以上となる。</p>		
<p>[検証結果と考察]</p> <p>教員アンケートにおいて、「授業づくり」「学級経営」に関する項目の肯定的回答が9割以上となり、教員の学習指導力および学級経営力の向上が数値的に確認された。また、児童アンケートにおいても、「学校満足度」「学級満足度」「集団の結びつき」の各項目で肯定的回答が8割以上となり、教員の指導力向上が児童の学校生活の満足度や学級の居心地の良さにつながっていることが示された。さらに、公開授業研究会参加者アンケートにおいて満足度が10割となり、本校の取組内容を自校で実践しようとする回答も9割以上に達した。授業観察においても、研究会後に他校教員が本校の授業構成や関わりの言葉を取り入れた実践を行っている事例が確認されている。</p> <p>以上より、知・徳・体のバランスを意識した教員研修の充実、教員の資質・指導力の向上に有効であり、その成果が児童の学習環境の質的向上に還元されているとともに、公開授業研究会を通して本研究の成果が波及・発信されていると評価できる。</p>		

6	成果・課題	<p>【見込まれる成果4】</p> <p><input type="checkbox"/> 「子どもが心豊かに力強く生き抜き未来を切り拓く力」の育成</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 「教員の資質や指導力」の向上</p> <p>本校は大規模校であるため、教員数や経験年数もさまざまである。その中で、校内研究として大学教員からの理論研修、先進的研究校からの教材分析研修、実技研修、集団づくり研修を共有することで、授業観、指導観、児童観をアップデートし、学校で共通理解できる。このことは、学校力向上に大きな役割を果たす。教員のめざす授業イメージが共有化でき、教員が満足して授業づくりに打ち込むことができる。</p> <p>《検証方法》</p> <p>教員アンケートを実施し、「授業づくりの悩みが改善した」「研究の内容が実践につながった」の肯定的割合が8割を超える。学校満足アンケートを実施し、満足度が8割を超える。その理由をインタビュー調査することで、肯定的割合の要因を分析する。</p> <p>〔検証結果と考察〕</p> <p>教員アンケートにおいて、「授業づくりの悩みが改善した」「研究の内容が実践につながった」の各項目で肯定的回答が10割となり、校内研究を通じた授業観・指導観・児童観の更新が数値的に確認された。また、学校満足アンケートにおいても満足度が9割以上となり、教職員の学校運営および研究体制に対する肯定的評価が示された。理論研修、教材分析研修、実技研修、集団づくり研修の共有を通して、教員間でめざす授業像の共通理解が形成され、授業づくりに対する意識の統一と実践の質的向上が認められた。インタビュー調査においても、「授業の見通しが明確になった」「実践に生かせる研究内容であった」といった肯定的な意見が多く確認されている。</p> <p>以上より、本取組は、大規模校における教員の多様性を強みとして生かしつつ、校内研究を通じた共通理解の形成と学校組織力の向上を実現しており、教員の資質・指導力の向上と学校力向上の双方に資する成果を上げていると評価できる。</p>
---	-------	--

6	研究全体を通じた成果と課題	<p>【研究全体を通じた成果と課題】 研究発表会等で使用した資料や研究冊子から引用し、端的に記述してください。</p> <p>1. 新規研究（1年目） ※継続研究2年目以降は1年目の記載をコピーして貼付する</p> <p>教員アンケートにおいて、「授業づくりの悩みが改善した」「研究の内容が実践につながった」の各項目で肯定的回答が8割以上となり、校内研究を通じた授業観・指導観・児童観の更新が数値的に確認された。また、学校満足アンケートにおいても満足度が8割以上となり、教職員の学校運営および研究体制に対する肯定的評価が示された。理論研修、教材分析研修、実技研修、集団づくり研修の共有を通して、教員間でめざす授業像の共通理解が形成され、授業づくりに対する意識の統一と実践の質的向上が認められた。インタビュー調査においても、「授業の見通しが明確になった」「実践に生かせる研究内容であった」といった肯定的な意見が多く確認されている。</p> <p>以上より、本取組は、大規模校における教員の多様性を強みとして生かしつつ、校内研究を通じた共通理解の形成と学校組織力の向上を実現しており、教員の資質・指導力の向上と学校力向上の双方に資する成果を上げていると評価できる。</p> <p>2. 継続研究（2年目） ※継続研究3年目の場合は、2年目の記載をコピーして貼付する</p> <p>成果○知徳体の3つの柱で取り組んだことで児童が安心して学ぶ環境が整い、学力向上へとつながった。「問い-対話-振り返りのサイクル」を回すことで、問いが学びの主体性を生み、単元の流れを子どもと創ることにつながった。対話は作成したルーブリックを活用したことで目標が明確になり、対話力の向上へつながった。振り返りの観点を明確にして記述しやすくし、次の学びへとつなげる手立てとなった。教職員へのポートフォリオの活用は常に問いをもち、自分ごととする研究となり効果的であった。以上のことより、児童・教職員・保護者が共に変化を実感できる研究となった。</p> <p>課題●自分たちで学びを推進する力（個別最適な学びと協働的な学び）を充実させたい。指導者が学びの評価、成果物の評価をどのようにするのか。また児童と共に評価をつくることのできないのかを研究したい。</p> <p>3. 継続研究（3年目）</p> <p>成果○「問い-対話-振り返り」の学習サイクルが学校全体に定着し、授業構造として共有化されたことで、児童が見通しをもち主体的に学ぶ姿が日常化した。○知・徳・体を統合した授業改善により、学力向上とともに協働性・自己肯定感・学習意欲が高まり、安心して挑戦できる学習文化が形成された。○研究手法の定着により、教職員の研究意識が高まり、学校としての授業観・指導観・児童観が共有化され、学校力の質的向上が図られた。</p> <p>課題●学習サイクルを評価と一体化した授業設計として発展させる必要がある。●児童の自己調整学習力の育成に向け、評価の在り方と児童と共に評価を創る仕組みの研究を継続する必要がある。●研究成果の体系化・発信を進め、持続可能な学校研究体制の構築が課題である。</p> <p>《代表校園長の総評》</p> <p>1. 新規研究（1年目） ※継続研究2年目以降は1年目の記載をコピーして貼付する</p> <p>学校力向上には、教員同士での共通の経験が不可欠である。同じものを見て感じ考える場を設定するための研修や研究の場を充実させることに全力を注いだ。共通の時間を過ごし価値観を共有し、子どもの見え方や授業観、子ども観、指導観を交流することで教員同士の学びやつながりが向上した。また、講師先生には本校の現在位置や方向性を指し示していただき、次への原動力をいただいた。教員の豊かな学びは児童の学びや学習環境に反映され、本校の力となり、公開授業を通して他校へと還元されたと考えている。この学びを来年度へつなげていきたい。</p> <p>2. 継続研究（2年目） ※継続研究3年目の場合は、2年目の記載をコピーして貼付する</p> <p>研究発表では300名を超える先生方に、本校の組織的研究・チーム力・研究内容の深まりに共感をいただいた。キーワードは自分事である。児童を自分事となる学びへ誘うための手立てを探り、教職員自身も自分事となる研究へ向かうための手立てを探ってきた。自分事となるためには、真摯に自らと向き合う必要がある。そのために必要なことを考え取り組んだ研究内容が賛同を得たと考えている。学校力向上は一日にしてならず。だが研究を重ねることで教職員の意識、児童の意識、保護者の意識は変わりつつある。今後も継続して取り組んでいきたい。</p> <p>3. 継続研究（3年目）</p> <p>3年間の研究を通して、本校の校内研究は「取組」から「文化」へと発展したと捉えている。「問い-対話-振り返り」を軸とした授業改善は、授業の型として定着し、児童の主体的な学びを日常の姿として根付かせることができた。また、教職員が共通の理念と実践イメージを共有し、研究を自分事として捉える組織文化が形成され、学校としての授業観・指導観・児童観の統一が図られた。本研究は、児童の学びの質の向上と教職員の専門性の向上を同時に実現し、学校力の持続的な向上につながる研究となった。今後は、本研究成果を体系化し、学校内外へ発信することで、地域・教育界への還元と次なる学校づくりへとつなげていきたい。</p>
---	---------------	--